

平成 2 7 年 5 月 2 0 日現在

機関番号：3 4 5 1 7

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：2 4 7 3 0 5 7 1

研究課題名（和文）今日的な不登校児童生徒への心理臨床的援助に関する研究

研究課題名（英文）Research about psychotherapy and counseling with school refusal today.

研究代表者

佐藤 淳一（SATO, Junichi）

武庫川女子大学・文学部・准教授

研究者番号：3 0 5 0 8 7 9 2

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、今日的な不登校児童生徒への心理臨床的援助に関する3つの研究を行った。研究1では、不登校を主訴とする中学生の個人心理面接の事例論文を対象として質的なメタ分析を行い、面接経過を実証的に検討した。研究2では、不登校の親面接の実践上の困難点を検討し、「現実の二重性」について理論的に論じた。研究3では、中学生の子どもの不登校をきっかけに来談した親面接の終結事例を報告し、子どもを巡る母親の罪悪感について考察した。

研究成果の概要（英文）：The study 1 examines qualitative meta-analysis about the case reports of the successful therapy for truancy at middle school student. The study 2 discusses "duality of reality" through various points of the process of counseling for parents. The study 3 investigates the process of psychotherapy for a mother whose son is non-attendance at school.

研究分野：臨床心理学

キーワード：不登校 中学生 心理面接過程 質的なメタ分析

1. 研究開始当初の背景

平成22年度文部科学省の学校基本調査によると、「不登校」を理由とする児童生徒数は小学校2万2千人、中学校9万7千人と発表されている。もちろん不登校の現象が一つの臨床単位と呼べないことも関係しているが、不登校の態様は多様化・複雑化を呈しており、いじめや非行、発達障害や虐待などの問題と重なる事例も増えている。一方、心理的要因の優勢な中核群においては、葛藤や不安が後退化しつつ長期化する例など、従来の枠組みでは捉えられない事例が指摘されている（藤岡，2005；伊藤，2009；大石，2003；佐藤，2005）。

これまで筆者らは、今日的不登校の特徴を明らかにするため、学校恐怖症に始まる、登校拒否、不登校に関する臨床心理学の事例論文を展望してきた（佐藤，2010d；佐藤ら，2011a；佐藤，2011d；佐藤ら，2012）。総じて見ると、心理臨床家の拠って立つ学派（理論）や技法によって事例の理解や対応は違いが大きく、統合的、包括的な議論は十分に行われているとは言いがたい。

こうした不登校臨床の知見は、心理臨床家一人ひとりの臨床経験によって事後的に導かれたものであり、今後、心理臨床家が事例を積み重ねることによって、新たなモデルを提起することが必要である。しかし、クライアント（以下、Cl）を直接対象とする臨床実践からセラピスト（以下、Th）が各自検証していくのはさまざまな限界がある。また、従来は理論（学派）や技法ごとに理論化、確証化されているプロセスに焦点が当てられがちで、既存のモデルや知見にはない点がしばしば見過ごされがちであった。そのため、面接過程のどのような点が心理的変容を引き起こしたのか実証的に検討を試みることは意義がある。

心理療法の中で Cl が援助的だったと同等する事柄は「重要な出来事」significant event、あるいは「援助的出来事」helpful event と呼ばれ、治療過程のインパクトにつながり、いかに心理療法が展開するか、Th が Cl の治療過程に貢献するかといった理解を深めることができる（Elliott, 1985）。たとえば Timulak (2007) は、事例の質的メタ分析を行った6編の論文を対象として二次的な質的メタ分析を行ったところ、重要な出来事について9つの中核的カテゴリーを見いだした。中でも「気づき／洞察／自己理解」と「保証／支持／安全」は、心理療法のアプローチが違っていてもすべての事例で見られており、心理療法の統合を考える意義を示唆している。

また、事例報告に記述された事例の経過は、Th が面接過程の重要性に基づいて選択されている点で「重要な出来事」と見なすこともでき、面接の段階ごとに概念化することによって面接のプロセスを捉えることができる（Iwakabe, 2003, 岩壁, 2007）。このように心理療法の事例経過を質的なメタ分析を用

いて系統化することは、効果的な過程を理解することにつながる（岩壁・小山，2002）。たとえば、対人不安を主訴とする、青年期の心理療法5事例を対象として重要な出来事の質的メタ分析を行ったところ、「治療関係」、「Cl の語り」、「感情過程」、「理解と気づき」、「症状の状態と改善」、「Th の介入と内省」という領域に、面接段階ごとに共通するカテゴリーが抽出されており、事例が違っていても重要な出来事には類似性があることが指摘されている（Iwakabe, 2003, 岩壁, 2007）。しかし、不登校の中学生生徒の心理面接プロセスについて実証的に検討されたものはほとんど見当たらない。こうした効果研究は、不登校への心理面接の援助的介入の合理性が問われるようになれば、いっそう重要になってくると予想される

2. 研究の目的

そこで研究1では、不登校を主訴とする中学生事例の面接過程において、「重要な出来事」を同定し、心理面接の段階ごとに分類することによって、面接のプロセスや流れを捉えることを目的とする。リサーチ・クエスションは「成功した不登校の心理面接において臨床家は、どういった出来事、介入、クライアントの行動、思考や感情、関わりを記載しているのだろうか」である。なお本研究で想定しているのは、不登校の中でも、いじめ、非行、発達障害、虐待、精神障害などが主となる周辺群を除いた、心理的要因の優勢な中核群（大石，2003）と呼ばれる Cl のこととする。

3. 研究の方法

不登校の事例論文は、国内では紀要レベルで公開されているものの一般公開されていない事例報告が多数蓄積されているが、本研究は一般公開されている学術誌の事例論文／報告を対象とした。当初は学術誌を限定せずにいたが、学術誌によって事例のライティング・スタイルや質などのばらつきが目立ったため、一定水準の形式と質を保つうえで、本研究では雑誌「心理臨床学研究」に掲載された事例論文を対象とした。

90年代と00年代（1990年から2009年までの間）に、雑誌「心理臨床学研究」に掲載された中学生（インテーク時）の不登校の事例論文は30編あった。本研究では、不登校中核群の心理面接の事例プロセスを明らかにするため、本人が来談する個人心理面接であるもの（親子合同面接、グループ面接、訪問、メール、電話面接、入院内や入所機関内の面接を除く）、インテークから終結まで記載されているもの、詳しい面接経過や Cl と Th とのやりとりが記載されているもの、10回以上の面接が継続されているもの、精神病圏、境界例、発達障害圏を除くものを基準とし、計9事例（男子4名、女子5名）を選出した。Cl は中1が3名、中2が1名、中3

が4名であった。相談機関は校内のSCが4件、医療機関が3件、教育機関が2件であった。Thは男性5名、女性4名であり、力動的アプローチが過半数を占めた。平均面接回数(期間)は47回(1年4ヶ月)であった。

次に、不登校臨床を実践している臨床心理士かつ大学教員1名、臨床心理学を専攻する大学院生(修士課程)1名、学部生1名が合議制に基づく質的分析を行った。まず、事例論文を1つ選び、その事例経過の部分抜き出し、重要な出来事としてデータ化した。次に、1つの出来事を表す一文から数文が何を意味するのか、その内容を同定・分類し、記述的なコード名を1単語から数語でつけた。そして、これらのコードから類似したものを集めて、それらに共通した特徴や意味を持つカテゴリーを抽出した。これらの作業を3名が並行して行いながら、その結果を話し合って適切なコード名を見つけていった。この作業の後、不登校臨床を実践している臨床心理士1名を外部監査者が加わり、4回に渡って分析作業を行った。まず、一事例のデータ分析のチェックを行い、その指摘を踏まえて、カテゴリーや分析領域について修正を図った。次に、一事例のカテゴリーを別の事例のカテゴリーにどこまで適用できるのか事例間分析を行った。

4. 研究成果

(1) 結果

当初は男女込みで概念化を行っていたが、男女別で違いが見られたため、途中から男女別に検討することとした。一方、90年代と00年代の論文に分けて検討していたが、違いが見られなかったため、年代別に分けて検討することにした。

その結果、「CIの出来事」「CI-Th関係の出来事」「Thの出来事」という3つの領域を見出した。「CIの出来事」の領域には、「イメージの表現、遊び、趣味の話」「情緒、感覚」「現実的な語り」「問題や症状の状態」という上位カテゴリーを、「CI-Th関係の出来事」の領域には「治療関係」という上位カテゴリーを、「Thの出来事」の領域には「Thの介入と内省」という上位カテゴリーをそれぞれ見出した。そして、心理面接の段階(初期、中期、後期)ごとに、上位カテゴリーに該当する下位カテゴリーを以下のように分類した。

① 「イメージの表現、遊び、趣味の話」

このカテゴリーは、「イメージの表現、遊び、趣味の話」と、『「イメージの表現、遊び、趣味の話」を通した情緒表出」という下位カテゴリーに分かれる。「イメージの表現」とは、描画(スクイグル、風景構成法、自由画等)、箱庭やコラージュ制作、空想活動、夢の報告等である。CIは心に浮かぶイメージを非言語的あるいは言語的に、絵画、箱庭、コラージュなどを表現したり、物語を創作したり、夢を報告したりする。「遊び」とは、トランプ、将棋、ジェンガ、ゲーム(RPG等)

などの遊びである。「趣味の話」とは、CIが漫画、ファッション、映画、アニメ、音楽、写真、オカルト等の、自分の趣味について話すことである。これらは、それぞれ独立したカテゴリーというより、むしろ現実と空想との間で展開し、CIの心理作業のメタファーとして表されているので、一つのカテゴリーとして概念化した。

男子の場合、初期は遊び道具を介してThと遊び、それを通して情緒を表す。中期以降もこうした遊びは続くが、イメージを表現したり趣味を話したりするようになる。女子の場合、男子のような遊びは各段階を通じて現れず、そのかわりに初期から、イメージを表現したり趣味の話をして、それらを通して情緒を表す。そうした内容は、中期、後期になっても変わらずに続けられる。

② 「情緒、感覚」

男女とも、初期には緊張やぎこちなさが見られる。男子の場合、沈黙が時間の多くを占め、Thから話しかけても反応が返ってこなかったりするが、女子の場合、つらさを表したり涙を流したりして積極的に情緒を表現する。中期になると、男子は沈黙や反応のなさ、緊張やぎこちなさが相変わらず続くが、恥ずかしさを表すようになり、情緒を表し始める。緊張やぎこちなさ、つらさや涙が続くが、一方で拒否や嫌悪、あるいはかわいらしさや女性らしさといった新たな情緒が出てくる。後期になると、男子は沈黙や反応のなさ、緊張やぎこちなさが消え、かわりに喜びや笑いといった情緒、さらにたくましさや平気さといった情緒へのとらわれなさが現れる。女子も緊張やぎこちなさは消えるが、つらさや涙、拒否や嫌悪は続き、一方でかわいらしさや女性らしさ、さらにたくましさが見られる。

③ 「現実的な語り」

男子の場合、初期、中期ともに、自分のことについて、あるいは友人との関係、先生や学校、家族とのことについてほとんど語られず、後期になって自分の問題や将来の進路について語られる。女子の場合、面接の初期から、来談や問題の経緯、友人関係での傷つき、先生や学校のこと、母親や父親のことなど、現実的な話が種類豊かに語られる。中期になると、自分の問題、友人との関係、母親のことと、語りの種類がいくつかに絞られてくるが、後期になると、それに外傷体験の想起、異性の関心などが加わり、語りの種類はふたたび増える。

④ 「問題や症状の状態」

このカテゴリーは不登校や他の症状の状態、あるいは変化のことであり、日常生活の行動上の変化も含まれる。男子の場合、初期から行動や活動の広がりがみられ、後期になると周囲のことが気にならなくなり自然体でいられるようになる。ただし、男子はそもそも言語的交流が少ないために、行動や活動の狭まりについて報告されないだけなのか

もしれない。女子の場合は、初期と中期において行動や活動の狭まり、問題や症状の出現が見られ、安定しない時期が続く。後期になって、周囲のことが気にならなくなり自然体でいられるようになる。

⑤ 「治療関係」

男子の場合、来談への意欲を示すのは女子と同じだが、Th と非言語的交流を行うものの、言語的関わりを拒否することもある。中期も非言語的交流によって Th との距離を縮めていき、後期も非言語的交流は続き、最後に終結への意思を示す。女子の場合、男性と同じく非言語的交流を行うが、あわせて言語的交流も行い、Th との距離を縮めていく。こうした非言語的および言語的交流は、面接の段階を通じて変わらない。終結に向けては、その意思を示すとともに、Th との別れの体験を明らかにする。「治療関係」の下位カテゴリーの種類は女子のほうが多い。

⑥ 「Th の介入と内省」

男女とも、心理療法の段階に関わらず、Th は Cl に心理的理解を行い、共感的に関わろうとする。また、Cl のイメージ表現を促すだけでなく、自身のイメージも描画や空想活動などによって初期から積極的に表現する。さらに、逆転移体験として、面接の中でとくべつな情緒や感覚を感じたり Cl や面接の夢を見たりする。これは、Cl を理解するものとして、あるいは治療の方向性を知るものとして働き、Th の内省は Cl への介入への手がかりとつながる。

(2) 考察

本結果では、不登校を主訴とする中学生事例の心理面接過程において、「重要な出来事」を同定し、面接の段階ごとに分類することによって、面接のプロセスを捉えることを検討した。その結果、「Cl の出来事」、「Cl-Th の出来事」、「Th の出来事」という領域に、「イメージの表現、遊び、趣味の話」、「情緒や感覚」、「現実的な語り」、「問題や症状の状態」、「治療関係」、「Th の介入と内省」といった上位カテゴリーが見出された。これらのカテゴリーは、不登校事例の包括的な理解を目指すための基本的な枠組みを意味している。

まず、「治療関係」や「Th の介入と内省」は、Cl と Th の信頼しうる関係性を示す点で、援助的出来事のメタ分析結果 (Timulak, 2007) で得られていた「保証／支持／安全」に相当すると考えられる。つまり、Th の報告であっても Cl の報告であっても、Cl と Th の信頼しうる関係性は、終結した面接に共通するプロセスと考えられる。

一方、対人関係を主訴とする青年期の面接過程 (岩壁, 2007) で得られていた「理解と気づき」や、援助的出来事 (Timulak, 2007) で得られていた「気づき／洞察／自己理解」は抽出されなかった。つまり、気づきや自己理解といったプロセスは概念化されなかった。これは、中学生という前思春期であるた

めに体験を理解し言語化することに限界があることも関係しているかもしれないが、自己理解の作業が必ずしもプロセスに促進的とは言えないことも示唆している。一般に成人のカウンセリングでは、Cl が自らの内的体験を言葉にして理解するなかでプロセスは進んでいくが、中学生の不登校事例の場合、Cl にとって困難な作業となるだけでなく、心理面接のプロセスを妨げてしまう可能性も考えられる。もっとも、後期になると「現実的な語り」に「自分の問題」が現れているので、面接の段階によって自己理解の意味が変わるとも考えられる。

一方、先行研究にはない本研究の独自カテゴリーとして、「イメージ表現、遊び、趣味の話」が抽出された。また、その下位カテゴリーである「『イメージの表現、遊び、趣味の話』を通した情緒表出」は、面接の段階や男女に関わらず共通して見られた。つまり、これらの媒介が自身の情緒とつながっていることを意味しており、不登校の中学生事例のプロセスにおいて重要な役割を担っていることがわかる。ここで興味深いのは、特定の技法に頼らなくても、趣味の話を通して内的過程が促進されることである。趣味とは、面接外でなされる、心の内に生じる統合過程のことであるが (Storr, 1990)、趣味を直接行わなくても趣味を話すことによって同じような働きを果たしていると考えられる。

もっとも、このカテゴリーが見られたのは、Th 自身のオリエンテーションに表現 (芸術) 療法や遊戯療法が含まれていたためかもしれない。あるいは、面接時にオリエンテーションのバイアスが働いていなくても、事例の経過を記述する際に、Th 自身のライティング・スタイルが影響した可能性もある (Iwakabe, 2003)。

ほかにも「情緒、感覚」のカテゴリーが抽出されたが、感覚は今回新たに見出された点である。感覚は情緒よりも前段階の知覚様式と考えられるので、面接初期に、沈黙、反応のなさ、緊張、ごちなさといった感覚が現れるが、一見すると抵抗と思われる表現でも、感情、感覚プロセスの始まりと捉えることができる。また他の上位カテゴリーと比べると、面接段階に共通する下位カテゴリーが見られるため、面接のプロセスは Cl の語りの内容よりも、情緒や感覚といった側面に表れやすいのかもしれない。

「治療関係」のなかで先行研究にはないカテゴリーとして、「非言語的交流」が抽出された。また、「Th の介入と内省」について、先行研究にはないカテゴリーとして、「Th のイメージ表現」が抽出された。つまり、不登校の成功事例において Th は Cl との非言語的交流や Th 自身の非言語的表現を行っており、Cl の非言語的交流や表現とともに独自の働きをなしていると思われる。Cl 自身の非言語的交流や表現が、Th との相互作用の中で生じているとすると、Th 自身の非言語的交流

や表現が重要になることを意味している。

次に、性差によるカテゴリーの違いについて考察する。女子の面接プロセスでは、「イメージ表現、遊び、趣味」で表されるイメージや空想とともに、現実的なことがらや治療者との関係についても言語化がなされて治療が展開するのに対し、男子の面接プロセスでは、「イメージ表現、遊び、趣味」で表されるイメージや空想を言語化するものの、現実的なことがらや治療者との関係を言語化しないまま治療が展開することが示された。これは、中学生男子の C1 には、現実的なことがらを話したり治療者との関係について言葉化することは、必ずしも女子のように促進的ではないことを示唆している。したがって、C1 の性差に応じて言語的／非言語的アプローチを使い分ける必要があるのかもしれない。

全体として、対人関係を主訴とする青年期の面接過程（岩壁，2007）と比べると、面接段階ごとに共通する上位カテゴリーは認められたが、その下位カテゴリーの共通性はそれほど認められず、重要な出来事の類似性は上位カテゴリーと下位カテゴリーとの間で異なっていた。こうした結果は、対象とした不登校という臨床単位の性質が関係していたかもしれない。

なお、当初予想していたような、事例の発表年代によるカテゴリーの違いは見られなかった。この理由は、事例論文の発表年が必ずしも実施時期と一致していないことも考えられるが、一方で、不登校の態様はさまざまでも、中核群の成功した心理面接過程はメタレベルにおいて時代による影響をさほど受けないことも考えられる。

本知見は、不登校を主訴とする中学生の心理面接過程について、学派（理論）に共通するプロセスの存在が示唆されたという意義を持つと考えられる。今後は、こうした実証的知見に基づいて、不登校の効果的な心理的援助を行うための、体系的な心理面接プログラムを開発し、その効果を検証することが求められる。

研究 2

今日の不登校児童生徒への心理臨床的援助においては、一般に、児童生徒本人がクライアントとして相談機関に来談するよりも、その親が来談する機会のほうが多い。したがって、親面接によって本人への間接的援助を図ることが主題となる。また不登校臨床においては、親への面接やカウンセリングが本人への間接的援助となるだけでなく、それ自体が問題解決の中心となることも少なくない。

しかし、親への面接やカウンセリングの実践には、本人面接とは異なる種々の困難さが伴い、それが臨床的にはさまざまな問題となりうる。にもかかわらず、これまで本人への

個人面接に焦点が当てられていて、そうした困難さが十分に論じられているとは言い難い。したがって、不登校の親面接はニーズがあるにもかかわらず、理論的にも臨床的にも検討の余地が残されている。

そこで研究 2 では、親面接の意義や定義を整理した上で、親面接の過程に生じるさまざまな困難点を取り上げながら、そこには親面接固有の、ある種の二重性がつきまとうことを指摘した（佐藤，2013）。とりわけ親面接で話題の中心となる、親の語る「子ども」の理解に焦点を当てて論じた。親の語る「子ども」は、従来指摘されてきたような、親から見た子どもの「外的現実」として捉えるだけでも、あるいは親自身の「心的現実」として捉えるだけでも十分とは言い切れない。そこで筆者は、そうした側面を「二重性の現実」と呼ぶこととし、親の語る「子ども」の内容を「二重性の現実」の視点から捉えなおすことによって、親面接についての理論的な再検討を行った。

研究 3

心理面接に来談する親は、自身の「子ども」を巡って多かれ少なかれ罪悪感を抱いている。とりわけ母親の面接では、自身の子育てについて自らを責めたり罪悪感を強く抱いていることが多い。逆に他罰的、他責的になっている母親もいるが、そうした場合であっても罪の意識を無意識で感じていることに変わりはない。しかし、この罪悪感を理解し受け止めていくのは容易でなく、しばしば面接のプロセスを遮るものとして働いてしまう。一方でそれに触れないままであっても、親自身が癒されることはないため、子どもへの援助に影響する。したがって、こうした「子ども」に対する親の罪悪感を Th がどのように理解し関わるかが、臨床場面ではとりわけ重要になる。

そこで研究 3 では、中学生の子どもの不登校をきっかけに来談した母親の終結事例を報告し、「子ども」を巡る母親の罪悪感について検討した（佐藤・中條・徳嵩・今井，2014）。面接の途中で子どもが登校するようになって、母親は心理面接の継続を要望した。そして、「子ども」を巡る罪悪感や後悔を流涙しながら繰り返し語り、自身の葛藤を整理していった。こうした罪悪感や後悔は、子どもとの分離の悲哀であると理解することができ、さらにはその後の母親自身のあり方の変容から、母親自身の個性化の萌芽にもなったことが示唆された。

こうした知見は、個から普遍に至る「臨床の知」として、普遍から個に至る「科学の知」としての先の知見を相補的に照らし出し、不登校臨床へ寄与するものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

(1) 佐藤淳一・中條 裕子・徳嵩 かおり・今井 恭平 (2014). 子どもの不登校をきっかけに来談した母親の心理面接過程－「子ども」を巡る罪悪感 上越教育大学心理教育相談研究 13, 67－76. 査読無

(2) 佐藤淳一 (2013). 親面接における二重性 上越教育大学心理教育相談研究 12, 91－100. 査読無

〔学会発表〕(計 2 件)

(1) Sato, J. (2014). Qualitative analysis of significant events in psychotherapy for school refusal in Japan. 122nd Annual Convention of the American Psychological Association. 8/8/2014, Washington Convention Center. (USA)

(2) 佐藤淳一・皆川恵 (2013). 不登校を主訴とする中学生の心理面接過程における重要な出来事－事例の質的なメタ分析 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会発表論文集, p.560 2013 年 8 月 27 日 パシフィコ横浜 (神奈川県・横浜市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 淳一 (SATO, Junichi)

武庫川女子大学文学部・准教授

研究者番号：30508792